

古典竜頭蛇尾

太宰治

青空文庫

きのうきよう、狂せむほどに苦しきこと起り、なすところなく
額の油汗拭ぬぐうてばかりいたのであるが、この苦しみをよそにして、
いま、日本文学に就いての涼しげなる記述をしなければならぬ。
こうしてペンを握ったまま、目を閉じると、からだがぐいぐい地
獄へ吸い込まれるような気がして、これではならぬと、うろろう
うろろう走り書きしたるものを左に。

日本文学に就いて、いつわりなき感想をしたためようとしたの
であるが、はたせるかな、まごついてしまった。いやらしい、い
やらしい、感想の感想の、感想の感想が、鳴戸の渦のようにあと

からあとから湧いて出て、そこら一ぱいにはんらんし、手のつけようもなくなつた。この机辺のどろどろの洪水を、たたきころして凝結させ、千代紙細工のように切り張りして、そうして、ひとつの文章に仕立てあげるのが、これまでの私の手段であつた。けれども、きようは、この書齋一ぱいのはんらんを、はんらんのままに掬すくいとつて、もやもや写してやろうと企てた。きつと、うまくゆくだろう。

「伝統。」という言葉の定義はむずかしい。これは、不思議のちからである。ある大学から、ピンポンのたくみなる選手がひとり出るとその大学から毎年、つきつきとピンポンの名手があらわれ

る。伝統のちからであると世人は言う。ピンポン大学の学生であるという矜持きようじが、その不思議の現象の一誘因となつて居るのである。伝統とは、自信の歴史であり、日々の自恃じじの堆積である。日本の誇りは、天皇である。日本文学の伝統は、天皇の御製に於いて最も根強い。

五七五調は、肉体化さえされて居る。歩きながら口ずさんでいるセンテンス、ふと気づいて指折り数えてみると、きつと、五七五調である。——ハラガヘツテハ、イクサガデキヌ。ちゃんと形がととのつて居る。

思索の形式が一元的であること。すなわち、きつと悟り顔であること。われから惑乱している姿は、たえて無い。一方的観察を固持して、死ぬるとも疑わぬ。真理追及の学徒ではなしに、つねに、達観したる師匠である。かならず、お説教をする。最も写実的なる作家西鶴でさえ、かれの物語のあとさきに、安易の人生観を織り込むことを忘れない。野間清治氏の文章も、この伝統を受けついで居るかのように見える。小説家では、里見弴^{とん}氏。中里介^かい^{ざん}山氏。ともに教訓的なる点に於いて、純日本作家と呼ぶべきである。

日本文学は、たいへん実用的である。文章報国。雨乞いの歌が

ある。ユウモレスクなるものと遠い。国体のせいである。日本刀をきたえる気持ちで文を草している。一筆三拝。

文章を無為に享樂する法を知らぬ。やたらに深刻をよろこぶ。ナンセンスの美しさを知らぬ。こ理くつが多くて、たのしくない。お月様の中の小兎をよろこばず、カチカチ山の小兎を愛している。カチカチ山は仇討ち物語である。

おばけは、日本の古典文学の粹^{すい}である。狐^{きつね}の嫁入り。狸^{たぬき}の腹^{はら}鼓^{づみ}。この種の伝統だけは、いまもなお、生彩を放つて居る。ちつとも古くない。女の幽霊は、日本文学のサンボルである。植物

的である。

日本文学の伝統は、美術、音楽のそれにくらべ、げんぎい、最も微弱である。私たちの世代の文学に、どんな工合いの影響を与えているだろう。思いついたままを書きしるす。

答。ちつとも。

私たちの世代にいたっては、その、いとどじょうじょう 嫻 嫻 たる伝統の糸が、ぶつんと音たてて切れてしまったかのようである。詩歌の形式は、いまなお五七五調であつて、形かんべきの完璧を誇つて居るものもあるようだが、散文にいたっては。

抜けるように色が白い、あるいは、飛ぶほどおしろいをつけている、などの日本語は、私たちにとって、異国の言葉のように耳新しく響くのである。たしかに、日本語のひとつひとつが、全く異った生命を持つようになって居るのである。日本語にちがいはないのだけれども、それでも、国語ではない。一語一語のアイデアが、いつの間にか、すりかえられて居るのである。残念である、というなんでもない一言でさえ、すでに異国語のひびきを伝えて居るのだ。ひとつのフレエズに於いてさえ、すでにこのように質的变化が行われている。

病トロツキイが、死都ポンペイを見物してあるいているニユウ

ス映画を見たことがある。涙が出たくらいに、あわれであった。
 私たちの古典に対する、この光景と酷似して居る。源氏物語自体
 が、質的にすぐれているとは思われない。源氏物語と私たちとの
 間に介在する幾百年の雨風を思い、そうしてその霜や苔こけに被われ
 た源氏物語と、二十世紀の私たちとの共鳴を発見して、ありがた
 くなつて来るのであろう。いまだき源氏物語を書いたところで、
 誰もほめない。

日本の古典から盗んだことがない。私は、友人たちの仲では、
 日本の古典を読んでいるほうだとひそかに自負しているのである
 が、いまだいちども、その古典の文章を拝借したことがない。西

洋の古典からは、大いに盗んだものであるが、日本の古典は、その点ちつとも用に立たぬ。まさしく、死都である。むかしはここで緑酒を汲んだ。菊の花を眺めた。それを今日の文芸にとりいれて、どうのこうのではなしに、古典は、古典として独自のたのしみがあり、そうして、それだけのものであろう。かぐや姫をレビユウにしたそうであるが、失敗したにちがいない。

日本の古典文学の伝統が、もつとも香気たかくしみ出ているものに、名詞がある。幾百年の永いとしつき、幾百万人の日本の男女の生活を吸いとして、てかてか黒く光っている。これだけは盗めるのである。野は、あかねさすむらさき野。島は、浮島^{うき}、八十^{やそ}

島。浜は、ながはま長浜。浦は、おう生の浦、和歌の浦。寺は、壺坂、笠置、法輪。森は、しのび忍の森、うたたね仮寝の森、たちぎき立聞の森。関は、なこそ、白川。古典ではないが、着物の名称など。きはちじょう黄八丈、か蚊がすり、あゐ藍みじん、麻の葉、鳴海しぼり。かつて実物を見たことがなくとも、それでも、模様が、ありありと眼に浮ぶから不思議である。これをこそ、伝統のちからというのであろう。

すこし調子が出て来たぞと思つたら、もう八枚である。指定の枚数である。ふたたび、現実の重苦しさが襲いかかる。読みかえしてみたら、甚だわけのわからぬことが書かれてある。しどろもどろの、朝令暮改。こんなものでいいのかしら。何か気のきいた

言葉でもって結びたいのだが、少し考えさせて下さい。

いよいよだめだ。これでおしまいだ。おゆるし下さい。私は小説を書きたいのです。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年6月27日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集第十卷」筑摩書房

1977（昭和52）年2月25日初版第1刷発行

初出：「文芸懇話会 第一巻第五号」

1936（昭和11）年5月1日発行

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2008年10月23日作成

2016年7月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

古典竜頭蛇尾

太宰治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>